

「戦争反対」を叫び続ける

12.8 宮澤弘幸検挙から82年

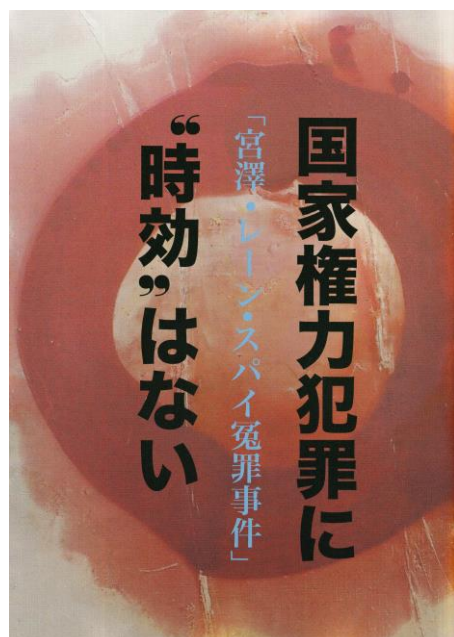


宮澤弘幸が軍機保護法違反で特高に検挙されてから82年となる12月8日、宮澤弘幸の姪・福原恵美さんと北海道大学・毎日新聞OBは、今年4月、供養塔に移動された宮澤弘幸の墓前で追悼法要を行った。

「平和憲法を根底から覆す戦争への道は、断固として阻止しなければならない」——。本会は2012年秋に再登場した安倍政権が「秘密保護法（当時は秘密保全法）」制定を策動している情勢下で、2013年1月、札幌で結成した。以来今日まで、「引き裂かれた青春—宮澤・レーン・スパイ冤罪事件」の真相を糺し、広める活動を通じて「国家権力犯罪に“時効”はない」ことを再確認し、戦争への道につながる全ての策動に警鐘を鳴らし阻止する闘いの一翼に加わってきた。

今、岸田政権は、安倍・菅政権を上回る悪辣さで、安保3文書を「閣議決定」し関連法制を成立させている。同時に恥じることなく対米屈辱外交を進めて沖縄を戦場化させ、政治姿勢は腐臭を極めている。

来る2024年、岸田政権を打倒し、「平和・いのち・くらし」を守る政治実現のために、引き続きその運動の一翼に加わっていきたい。



新聞とジャーナリストは立ち上がれ！

敗戦後、朝日新聞は「国民と共に立たん」と宣言しました。2017年4月27日、「共謀罪法」が強行成立させられる直前、ジャーナリストたちは立ち上がりました（写真）。ところが今、ウクライナで、パレスティナで現に戦争が引き起こされ、日本は戦争前夜です。この現状の中で、新聞とジャーナリストは何をしているのでしょうか。

新聞を沈黙させてはなりません。ジャーナリストをひるませてはなりません。その声を高めましょう。



なぜ記者たちは新聞社を辞めるのか

「なぜ記者たちは新聞社を辞めるのか」「どうなる？ どうする？ これからのメディア」。11月17日発行の『週刊金曜日』が、こんな刺激的なタイトルで特集を組んでいる。「このところ、新聞社を辞める記者が目立ちます」として、吉永磨美(元毎日)、三浦美和子(元秋田魁)、韓光勲(元毎日)、南彰(元朝日)の各氏が実名で登場。他に元地方放送局勤務(50代・女性)、元地方紙記者(30代・女性)が匿名で退社の事情を語っている。このうち吉永、南の2人は元新聞労連委員長である。問題意識を持ってメディア改革に取り組んできたはずなのに、どうして辞めたのだろう。

【遅れている「変革する時代」への対応】「私はもともと『50歳になったら辞めよう』と思っていたことに加え、新聞労連で『会社は変われ』と言っているが、どんどん辞めていく人たちを尻目に自分だけ会社に戻るの筋が通っていない気がしていました」。吉永さんは辞めた理由をこんな風に言う。さらに今のメディア状況について「理想に燃えてジャーナリスティックな記事を出そうと頑張っていた人ほど、会社に失望して去って行く。そして残念なのはメディア業界からも去るんです。業界の損失だし、ひいては民主主義の崩壊につながりかねない話だと感じています」「新聞購読数のピークは1990年代後半で、その後は減る一方。なのにいまだに人気産業と勘違いしている。社会が変革する時代への対応を業界全体でやらなかったから、いま追い込まれているというのが実情でしょう」と指摘する。

【「絶望感ではなく、絶望しかないのです」】南さんは10月31日付で「本日、朝日新聞を退職することにな

りました」という「退職挨拶文」を社に送った。その冒頭で述べているのは、読売新聞の業界制覇の動向に対する危惧感である。読売の発行部数は、朝日、毎日、産経の三紙合計を上回り、日経を含めた全国紙五紙の中で45%のシェアを占める。業界トップの地位を確保し、さらにLINEヤフーや電通との共同事業の推進にも向かう。軽減税率の適用や外資による輪転機メーカーの敵対的買収阻止などでも主導権を発揮した。これに対して朝日は「目先の数字と危機管理ばかりに注力する内向きな上層部のもと、全国紙シェア半数に迫る『読売新聞』に対抗するリベラルな言論の軸を維持していくことが難しくなってきた」。南さんは、このことが朝日退社の直接的動機だと語る。「そう、今の朝日新聞という組織には、絶望感ではなく、絶望しかないのです」(「退職挨拶文」)。

【それでも聞きたい「踏みとどまってたかう道は…」】「(メディア会社を)辞めた人たちで連帯する場が必要ではないか」。そんな思いで吉永さんは、オンラインメディア及び取材ユニット「生活ニュース commons」を立ち上げた。記者が生活者の目線で伝える「新しい時代の報道をつくっていきたい」と抱負を語る。南さんは沖縄の琉球新報に転職して記者活動を続ける。「全国紙から地域に根ざした新聞社へと移ったのは、新たなニュースの生態系づくりを目指していきたいからだ」。

元新聞労連委員長の2人が記者として現場で感じた問題意識には同感だ。長年働いてきた会社は辞めたが、メディアの世界で新たな活動を期す気持ちも分かる。その上でなお、敢えて言いたい。「踏みとどまってたかう道はなかったのですか」と。(戸塚章介)
(「メディアウオッチ100」 第1746号から)